［第1回］

駐日英国大使館 公使参事官 貿易・対英投資アドバイザー クリス ヘファー 氏

Britain is Great

駐日英国大使館は、日本に数ある大使館の中でも、皇居に最も近い大使館の一つです。その立地条件の良さからしても、日本にとって、いかに英国が重要な国であるかがわかります。今回、公務が大変お忙しい中、クリス ヘファー公使参事官に、インタビューに応じていただきました。ヘファー公使参事官は、奥様が日本人でおられるなど、真の親日派とお見受けしました。

日本に貢献する英国の製造業

前野　英国というと、リーガルサービスやファイナンスなど、B to Bのサービス業が強い、というイメージがあります。エンジニアリング協会の会員企業も、こうした分野で大変お世話になっているのですが、英国の製造業は、どのようなものなのでしょうか。

ヘファー　英国経済の80%はサービス業であり、おっしゃったような業種が強い、ということは事実です。しかし、そのことは、英国の製造業に見るべきものがない、ということを意味しません。日本に貢献している英国製造業をご紹介しましょう。まず、新型コロナウイルスに対するワクチンで有名なアストラゼネカ社があります。同社は、ケンブリッジに本社を持つ製薬会社ですが、日本法人も設立しており、同社の研究開発費は国内第3位となっています。

前野　そんなに多くの投資を、日本になさっているのですか。

ヘファー　アストラゼネカ社だけではありません。同じく製薬会社であるグラクソ・スミスクライン（GSK）社は、ロンドンに本社のあるグローバル製薬会社ですが、栃木県日光市に工場を持つなど、日本で約4,000人の雇用を生み出しています。

前野　日本は、英国の製薬会社に大変お世話になっているのですね。

ヘファー　日本に貢献しているのは、製薬会社だけではありません。グラスゴーに本社を置くアグレコ社は、電源・温度制御機器レンタル事業の世界最大手企業ですが、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のオフィシャルサポーター契約と供給

契約を締結しています。また、福島第一原子力発電所の廃炉作業に使われているロボットアームを製造したオックスフォードテクノロジー社という企業もあります。

英国の製造業の特徴

前野　日本がいかに英国の製造業にお世話になっているかが、よくわかりました。ところで、英国の製造業の特徴とは、どのようなものなのでしょうか。

ヘファー　まず、規模は小さくても、将来性の高い企業が多い、ということが挙げられます。先ほど申し上げたオックスフォードテクノロジー社もそうなのですが、「大学発ベンチャー企業」が大変多く、しかも成功している企業が多いです。英国では、過去５年の間に、ユニコーン企業（評価額が10億ドル以上に急成長したスタートアップ企業）が、43社生まれています。例えば、2013年にケンブリッジで設立されたダークトレース社は、サイバーセキュリティ分野で、世界をリードする企業の一つとなっています。

もう一つ、英国の製造業の特徴を申し上げれば、極めてオープン、ということが挙げられます。これは、英国人の資質にも起因するのですが、英国企業は外国企業との間に垣根を設けません。したがって、日本企業の中には、優秀な英国企業を買収して、ビジネスを拡大しているところもあります。また、日立製作所が2014年4月に、交通システム事業のグローバル本社機能をロンドンに設置したのも、こうした英国の開放性を気に入っていただけたからだと思っています。

今後、日英企業が協力すべき分野

前野　既に英国製造業が日本に多大な貢献をしてくださっていること、及び英国には数多くの優秀な企業があることは、よくわかりました。ところで、今後日英企業が協力していく分野としては、どのような分野があるとお考えですか。

ヘファー　まず、再生可能エネルギー、特に洋上風力発電の分野が有望だと思っています。英国は、洋上風力発電の導入量では、群を抜いて世界第1位です。導入に当たっては、多くの日本企業にも、様々な形で参加していただいています。英国は、北海油田の開発を行ってきた実績があり、この分野では他国に比べて優れている、と自負しています。日本の沿海は、遠浅の北海と違って、かなり水深が深いため、浮体式の洋上風力発電が必要だと思います。海洋資源開発の分野での英国の知識と経験が、日本に役立つと信じています。

前野　先月、スコットランド国際開発庁と共催で、スコットランドの洋上風力発電技術や水素技術を紹介するセミナーを実施したところ、数多くの参加者を得ました。日本の関係者は、英国の技術に大いに関心を有していると思います。洋上風力発電以外に、日英企業が協力すべき分野はあるでしょうか。

ヘファー　日英企業が協力をしていく分野は、たくさんあると思います。協力の枠組みとして、今年の1月1日から日英包括的経済連携協定（日英EPA）が発効したことは、大きな成果だと思います。ところで、今回の協定は、歴史上2番目の自由貿易協定であることをご存じですか。

前野　日英同盟があったことは知っていますが、それではないですよね。

ヘファー　はい。それよりずっと昔の1613年のことです。イングランド王のジェームス1世（スコットランド王としてはジェームス6世）が、征夷大将軍の徳川家康との間で短い書簡のやり取りを行い、日英間で自由に貿易を行うことを約束したのです。その書簡の原本は、今も、この大使館内に保管されています。

前野　そういえば、英国大使館のホームページで、「ジェームス1世が、当時の最先端技術でできた望遠鏡を徳川家康に送り、そのお返しとして、徳川家康は日本の鎧を送った」という記事を読みました。

ヘファー　環太平洋パートナーシップ協定（CPTTP）に参加表明していることからもわかるように、英国は、「開かれたアジア太平洋」を重視しています。その中でも、日本はＧ７のパートナーであり、同じ価値観を有する友好国であると思っています。したがって、安全保障分野でも一層の連携強化を深めていきたいと考えており、昨年11月、英国のBAEシステムズ社が、日本の防衛省が募集している「航空自衛隊のF-2戦闘機の後継機」の開発に参加表明しました。もし我々の提案が採択されれば、今後50年間にわたる日英協力が行われることとなります。

前野　日英協力の可能性のある分野は無限にある、ということですね。ところで、海外の企業から、よく「日本企業は決断が遅いため、協力関係がうまくいかない」ということを聞くのですが、どうお考えですか。

ヘファー　私は、これから日本企業と協力していこうという英国企業に対して、「日本人の考え方は、英国人と違って慎重であるため、最初のステップに時間がかかるかもしれない。しかし、一旦、日本人が決断すれば、その後のプロセスは順調にいく。したがって、焦ってはならない」と言っています。

前野　ありがとうございます。しかし、日本企業としても、決断をできるだけ早くしなければなりませんね。

地球温暖化は喫緊の課題

前野　ここで、話題を日英間の問題から、グローバルな話に移したいと思います。今年予定されている重要な国

際会議であるG7とCOP26について、いずれも英国が議長国となっています。COP26では当然ですが、G7でも、地球温暖化問題への対応が主要な議題となるのでしょうね。

ヘファー　そのとおりです。英国は、地球温暖化問題を緊急に対応すべき課題として、きわめて重視しております。英国は、「2050年に温室効果ガスの排出量を実質ゼロ（ネットゼロ）にする」という目標を立てており、主要経済国の中では一番早くに法制化をしました。自動車を例にとると、2030年には通常のガソリン車の販売を禁止し、2035年には、ハイブリッド車の販売も禁止されます。また、海外の化石燃料事業の海外支援に終止符を打ち、新規の公的ファイナンスや事業促進支援を停止することを発表しました。

前野　原子力発電については、いかがでしょうか。

ヘファー　2050年までにネットゼロ目標を達成するためには、原子力発電が電源構成の一部であることが必要であると英国は確信しています。原子力は低炭素で安定的に発電することが可能です。昨年12月に発表した英国のエネルギー白書では、2050年までにネットゼロ目標を達成するにあたっての原子力発電の重要性を明言し大規模プロジェクトを引き続き検討しています。また、英国における先進的な原子力技術の開発に対する資金援助についての発表も、白書に含まれています。

　また、G7やCOP26においては、各国から、地球温暖化問題に関して、日本の一層の貢献を求める声が上がるのではないか、と思っています。すでにG7気候・環境大臣会合では、「気候、生物多様性、環境」をコロナからのより良い復興戦略と投資の中心に据えることを強調しました。その中で、年内に排出削減対策が講じられていない石炭火力発電への新規の国際的な公的支援の全面的な終了の必要性について合意しました。これは日本にとって脱炭素、そしてそれを実現する為に必要な段階的な石炭脱却への道の、非常に大きなステップとなります。

　また、私は、昨年10月に菅義偉総理大臣が出された「2050年カーボンニュートラル」のコミットメントを、高く評価しております。従来、日本政府の政策決定は、ボトムアップである、と言われてきました。しかし、今回の政策決定は、菅総理が極めて強いリーダーシップを発揮された結果だと思っています。

前野　確かに、従来型の「政策の積み上げ」では、「2050年カーボンニュートラル」は出てこないと思います。しかし、日本の経済界の一部には、原子力発電所の再稼働がなかなか進まない中で、石炭火力発電所の全面停止などは難しい、という意見もあることは事実です。

ヘファー　英国では、脱炭素化をエネルギー政策の中心に置いています。我々は、温室効果ガス排出量を2030年までに68%、2035年までに78%削減し、2050年までにネットゼロにすることにコミットし、これが今後必要な政策決定の定義となってくるでしょう。日本と英国が共通の目標を達成するために、これからも協力をしていけたらと思っています。

　石炭火力発電からの脱却については、一筋縄ではいかず、たくさんのハードルがあると理解しています。しかし、よりクリーンなエネルギーへの移行を加速することは不可能ではないのです。英国では2012年、電源構成の40%が石炭由来のものでしたが、現在では2%を切っています。10年未満で、ほぼ0%まで減らすことができました。また主要経済国の多くでは、既に化石燃料より再生可能エネルギーが安くなっています。この傾向は今後も続くことが予想され、近い将来、多くの市場において、再生可能エネルギーは石炭よりも安くなるでしょう。再生可能エネルギーへの新規投資コストは、既存の石炭資産を運用する費用よりも安くなる、というのが世界の常識となりつつあります。

Chris Heffer（クリス ヘファー）

　2015年9月に駐日英国大使館　貿易・対英投資ダイレクターに就任。英国に拠点を置く企業への対日輸出促進及び日本企業への対英投資促進を担当。2013年より2年間、ビジネス・イノベーション・職業技能省（BIS）において、成長政策担当の副ダイレクターとしてインフラ、調達政策、及び社会移動性の調査などを担当。2005年からの6年間は保健省に在籍。

　オックスフォード大学を1996年に卒業し、工学と経済学及び経営学における修士号を取得。1999年、ロンドン大学SOASにて現代日本学のディプロマ学位を取得。

英国人の特質とは

前野　堅い話が続いたので、ここで話題を変え、英国文化の話をお聞きしたいと思います。私は、英国政府系の英語教育機関である「ブリティッシュ・カウンシル」で英語を学んでいます。そのレッスンの中で、英国文化が教材として出てくるのですが、英国ファンを自認する私でも、「知らなかった」と思うことが多くあります。英国文化の特徴とは、どのようなものでしょうか。

ヘファー　はじめに、英国文化の基盤をなす英国人の特質のお話をしたいと思います。まず、我々は、「Fairness」を重視します。このことは、我々がス

ポーツを通じて「Fairness」を学んでいることに起因しているのだと思います。ご存じのとおり、英国は、ラグビーやサッカー（イギリスでは、フットボールと呼びますが）の発祥の地であり、多くの人が楽しんでいます。英国人は、日本人と同様、「列を作って並ぶ」ということが大好きです。

次に挙げるべき英国人の特徴は、先ほども申し上げましたが、「開放性」「異文化に対する寛容さ」であると思います。食べ物を例に挙げれば、ロンドンでは、多様な国の多様な料理を堪能することができます。英国人が好きな食べ物というと、日本人の皆さんは、「フィッシュ　アンド　チップス（Fish & Chips）」を思い浮かべるかもしれませんが、実は、これより人気のある料理は、インド由来の「チキンティッカマサラ（Chicken　tikka masala）」です。また、日本人の皆さんにはあまり知られていませんが、英国のスパークリングワインも、世界中で高い評価を受けています。「ナイティンバー」というブランドは、フランスのシャンパンより高評価を受けていると思います。通信販売でも購入できますので、是非一度ご試飲いただければ幸いです。

英国文化の特質は多様性

ヘファー　最初の「英国文化の特質とは何か」というご質問についての答えは、「多様性（Diversity）」であると言えるかもしれません。英国は、「連合王国」であり、４つの地域（イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド）がそれぞれ独自の文化を誇っています。また、先ほど申し上げたように、異文化を積極的に受け入れることにより、更に文化の多様性を増しています。

前野　スコットランド人の先生は、特に郷土愛が強く、「バノックバーンの戦い」（1314年に、スコットランドがイングランドに勝利した戦い）の話をすると、大変喜びます。また、毎年8月にロンドンで行われる「ノッティング　ヒル　カーニバル（Notting Hill Carnival）」を教えてもらいました。カリブ海の伝統を受け継ぐ世界屈指の規模のストリートカーニバルですが、最初に動画で見せられた時は、ロンドンで行われているお祭りとは思えませんでした。

Brexitは順調

前野　最後に、これから英国に投資をしようと思っている日本企業は、Brexitの状況を心配しているかもしれません。そこで、簡単に現状をご説明いただけますか。

ヘファー　Brexitについて、一言で申し上げれば、順調に進んでいる、ということが言えます。英国に所在する日本企業に対しては、英国政府が状況を説明するレターを発出しています。EUとの間には、ノーマルな貿易関係が維持できています。

前野　本日は、お忙しい中、大変ありがとうございました。

インタビュア後記

英国と日本との関係は、第2次世界大戦という不幸な時代を除けば、極めて良好なものでした。日本からは、初代首相伊藤博文や文豪夏目漱石など数多くの留学生が、英国を訪れました。日本が日露戦争に勝利できたのも、日英同盟のお陰と言えます。他方、英国から日本に訪れて活躍した英国人と言えば、徳川家康の外交顧問であった三浦按針（ウイリアム　アダムス）、明治維新を陰で支え、後に駐日公使（現在の大使に相当）となったアーネスト　サトウ、日本初の鉄道建設に尽力し、今は横浜の外人墓地に眠るエドモンド　モレルなど、枚挙に暇がありません。

英国と日本は、「民主主義」「基本的人権」「法の支配」などの基本的な価値観を共有するパートナーとして、今後も、より広い分野で協力していくべきだと思いました。

当協会専務理事
前野 陽一

大使館データ

大 使 館 名：駐日英国大使館
所　在　地：千代田区一番町
ホームページ：https://www.gov.uk/

イングリッシュ・スパークリングワイン

英国は古くからワインの取引では中心地であり、現在でもワイン業界にとって欠かせない産地である。英国産ワインの約70％がスパークリングワインで、シャンパーニュと同じくピノ・ノワール、シャルドネ、ピノ・ムニエが三大品種。生産量はまだ多くはないが、シャープな酸味が特徴で、繊細な料理が好まれる昨今の世界的な食事トレンドにもマッチしており、和食にも合う。